田中隆尚撰集

第十卷

田中隆尚撰集　第十卷

平成十八年八月十五日印刷
平成十八年八月二十五日發行

著　者　田中隆尚
發行者　唐澤明義
發行所　展望社
郵便番號一一二・〇〇〇二
東京都文京區小石川三・一・七
エコービル二〇二
電話　〇三(三八一四)一九九七
FAX　〇三(三八一四)三〇六三
振替〇〇一八〇・三・三九六二四八

印刷・壯光舎印刷／組版・エムツークリエイト
ISBN4-88546-154-5

紀行二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

目次

へらす巡歴
南の巻……七
編集覺書……四三五

へらす巡歴

南の巻

昭和四十四年四月十一日　金曜　アテナイ到着

昨夜イタリアのブリンヂシを出帆した船に一夜をあかした。寢臺はなかつたが、大きな船室に日本の列車の一等席なみの安樂椅子がたくさんそなはつてゐて、そのうへ客がこんでゐなかつたので、らくらくとねむつた。午前四時三十五分に目をさますと、意外なことにすでに眼前にあさぎ色の陸がよこたはり、その空はあかねに燒けてあけぼのになつてゐる。アドリア海を一夜のうちによこぎつてバルカン半島のアルバニアあたりにさしかかつてゐるのであらう。東の空はしらじらとしらみかけ、海はよどんでゐるが、白波はまつたくなくしづかである。最初一つ色に見えてゐた陸にしだいにけじめがつき、山脈のつらなりが近山と遠山にわかれて、近山はかさをに、遠山はうすいあさぎになつてきた。雲はわづかに東の空にいくつか小片がうかび、その雲のふちはあかねにそまつてゐる。

六時に甲板にのぼると、はからずも船はせまい水道をとほつてゐる。ふしぎにおもつて船員に聞くと、右がははケルキユラ(コルフ)島で、ケルキユラとバルカン半島とのあひだの水道にさしかかつたのであつた。ケルキユラ島には岩層からなる山の峰がくえ、そこに日の光がてりかげつてゐる。そこ

のすそとほかの低山には草が生えてゐるが、くすんだ灰綠一色に見えてゐる。やがてひくい山のつらなりに樹木があらはれ、そのなかに四層ばかりの白い家が櫛比し、塔が二つたち、その右に城跡らしい石垣があつた。これがケルキユラの町であつた。灣には小島が三つあり、その一つはかなり大きく人家もたつてゐた。港はその右かたに見え、六時二十五分、ギリシア時間になほして七時二十五分に船はともを埠頭につけた。

ケルキユラの町の屋根は一見黑灰色の瓦屋根が多い。丘には青草が生え、オリイヴや絲杉の林がある。しばらくして希、伊、佛、英の四ケ國語で「おねがひいたします。船からでないでください。出帆いたします」といふ放送がきこえ、七時四十分に出帆した。左がはの城あとらしい岬のむかうにもまた灣があり、そこにも町が見えてゐる。ケルキユラの町のつづきであらうか。かうしてケルキユラ島を見てゐると、島といふよりもむしろ大陸のやうに見える。船を追つてくるかもめのむれがときどきなにかにおどろいてみだれさつてゆくが、また追ひかけてきてクワツ、クワツと鳴く。半島のはうもすでにギリシア内にはいつてゐて、日にてりかげる山々の山ひだが直接海におちいり、そこに家一軒見えない。やがてなにもないのつぺりとした島が見えてきた。青草がはだらにはえ、すそに岩石がしらじらとあらはれてゐる。半島のはうも山ひだが綠茶に見えてゐるだけである。

九時十分に半島の港イグウメニツアに着く。小さな山麓の町で、赤瓦の家や黑みのある瓦ぶきの家に四角のあたらしい家がまじつてゐる。白楊らしい木があるが、なんの木かはつきりしない。山の中腹に杉のやうな常綠樹が見えるが、これもなにかよくわからない。この港を出航してまもなく岬にち

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

かづく。半島もいまはひくい丘で、樹木がいつぱいしげつてゐるが、水ぎはは岩石で海につかつてゐて、家ひとつ見えない。島が見えてきたが、これもおなじ地勢である。ここをすぎて船はイピロス地方の陸からかなりはなれた。

喫茶部に行つてギリシア語でパトライから乗るバスがアテナイのどこに着くかたづねて、牛乳を飲んだ。白服を着たコツクはわたしがギリシア語でしやべるのでよろこんで、日本のどこにおすまひかとか、教授かとか、ヨウロツパには飛行機でこられたかとか、どこをまはつてこられたかとか、しばらく話をして、そのあとでこんにちはとか、ありがたうとか、さやうならとか、四つ六つ八つとか、いりませんとか、そのほかいろいろギリシア語でいつて、それにあたる日本語をわたしに聞き、それをぜんぶ紙片に書きとめてゐた。なににするのだらうとおもつて、日本人はあまりこないでせうにといふと、この船にときどき乗るといふ。それでそんなときのために役だてようといふことがわかつたが、それにしても喫茶部のコツクあたりがこんな勉強をするのに一驚した。一杯の牛乳をながくかかつて飲んで話し、最後に禮をいつて牛乳代をはらはうとして、いくらですかとたづねると、さきほどわたしがをしへた日本語をおぼえてゐて「イリマセン」とさつそくつかつたのでびつくりした。「日本語ををしへていただいたお禮のつもりです」とギリシア語でつけたしていつた。わたしも日本で勉強してきたばかりのギリシア語が初日から役だつて、牛乳代がただになつたので大いに氣をよくした。あとでこのコツクに日本の一圓と五圓の硬貨を贈ると、おほきにありがたうといつた。

陸はあひかはらず人家の一軒もない山の岩壁が海におちいつてゐる。中腹には草がはえてゐるが、

木はない。わたしはかつて春さきのシベリアをとほつたときの風景をおもひおこした。あのときシベリアはなかば凍つた枯草のみの草原か、樹木はあつても葉のおちつくした冬がれの荒涼たる光景であつたが、ギリシアはいまは春もふかく、かうして船のうへで風にふかれてゐてもここちよいあたたかさなのに、陸は岩石にただわづかの草がまとはりついてゐるだけの、なんともいはれぬ荒涼たる様相を呈してゐる。ケルキユラ島の對岸をすぎてすでにかなり南下してきてゐるのに、半島の岸はほぼ似たりよつたりの地勢で家はほとんど見かけなかつた。ギリシアは國土はひろくないうへに、こんな地勢ではいくらあつても利用することはできないだらう。わたしは日本にゐて人工にけがされた自然にいや氣がさし、あれほど自然そのままの原野に憧憬をいだいてゐたのに、ギリシアのこの人手もなにもくははつてゐない岩山つづきの風景をかうもいく時間も見てゐるとふしぎに不安になつてくる。

喫茶部のコツクと話してゐたとき、わたしのギリシア語を聞きとめたふたりの青年がふしぎさうにわたしを見、コツクからわたしのことをいろいろ聞いてゐたが、喫茶部をさつて甲板の椅子に腰をおろしたときにふたりはわたしに話しかけてきた。ふたりはシケリアのメツシナ大學に留學してゐて、復活祭の休暇でギリシアに歸省するといふ。わたしはギリシア語でしやべるのがまだぎこちなく、どうかとおもつたが、イタリア語はもうつかはないことにして、すこしづつ話してゐるうちに、一年半も勉強しただけにしだいにおもひだしてきて、なんとかかとか一時間も話した。わたしがギリシア語は語彙が多い、たとへばいくらするかといふのでも、ポツソ・カアニ、ポツソ・コスチイジ、ポツソ・スチヒイジと三とほりもあるといふと、よくご存じだといつてわらひ、なんで勉強なさつたのかとい

ふ。アシミイルとかリンガフオンで勉強したといつて、アシミイルの本をだして見せると、これはいい、語彙が豐富だといつた。自分たちは二ケ月でイタリア語をなんとかしやべれるやうになつたが、あなたはギリシア語をよくお話しになるといふ。「いいえ、すこしです。ほんのすこしぢやないかと心配してゐます」といふと、わらつて「いいえ、お上手です。このうへ一ケ月もギリシアにいらつしやればたいへん上手におなりでせう」といつた。かたはらの椅子に勞働者ふうのギリシア人が腰かけてゐて、これもしきりにわたしに話しかけてきた。

午になつたので、一旦船室にかへつて十二時四十分より一時半までひるねをし、おきてから携帶のパン、ソセイジ、オレンジをたべ、ふたたび甲板に行つて、學生と勞働者ふうの男の座にくははつた。二時半ごろ右がはにも陸が見えてきて水道にはいつた。勞働者ふうの男があれがイタケ島だといつた。これものつぺりした島で、木はたくさんはえてゐるが、家のない島であつた。その男にそれをいふと、あの山のむかうに家があり、自分の家もそこにあるといつた。山にひとところだんだん畠が見えた。かなり大きな島で灣がいくつもあり、船がすすむにつれてあたかも二つの島があひよつたかのやうに山のわれめが見えてきた。勞働者ふうの男は自分の家はあのわれめのしたにあるといひ、オヂユツセウスの生家がそのむかうのたかいところにあるといつた。

左の半島がはに島がいくつも見えてきたので、この男に聞くと、あれがレウカス島で、その手まへの小さいのがアルクウヂ島、そのつぎのひらたいのがメガニシ島、小さくもりあがつたのがカラモス島で、いづれも人家は見えぬが、すこしあるといふ。そのつぎのアトコス島は小さく人家はないとい

ふ。この島には峰がいくつもあり、一つはとがつてゐた。

ケルキユラ島をすぎたあたりから海水のいろに日本といちじるしいちがひのあるのを感じてゐたが、それがわたしの心中でしだいに凝固してきて、あをむらさきとか、濃紺とか、紫紺とかいふことばになつてうかび、それをたびたびひそかに口ずさんでゐた。じつさいふかいふかいはなだいろであつた。しかもその海がいまはしづかで白波がない。かもめは船をおひ、甲板では青年は上衣をぬぎ、少女は靴も靴したもぬいですあしを日光にあててゐる。わたしは携帯の食事をたべただけなので、その點かるい空腹をおぼえてゐたが、他になにひとつ不服はなく、船の旅は船よひさへしなければこんなにいいものかとおもふ。それは目的をめざしながらじつは遊んでゐるやうなものである。遊びのやうでありながらしかも目標に徐々にちかづいてゐるのである。

四時十五分にパトライ灣のそとがはのオクシア島のそばをとほつた。この島も岩のでこぼこした峰に草がわづかにすがりついてゐるだけである。西方にイタケ島とケフアレニア島がかさなり見え、ザキユントス島が南西のかたにかすかによこふしてゐた。

四時半すぎにペロポネソス半島がはじめて見え、五時ちかくに船はパトライ灣にはいりかけた。しかし兩岸はまだ大きくひらいてゐる。南岸のペロポネソス半島の高峰が白くなつてゐたが、これは石灰岩ではなく、雪がつもつてゐるのであつた。海岸に家があり、どのあたりかとおもつてゐると、船はそこにしだいにちかづいて町が見えてきた。パトライの町であつた。

船は六時十分ごろパトライの港に着き、はじめてギリシアの地をふんだ。おもへば三年まへロオマ

ではじめて「ニオベの娘」と「ルドギシの玉座」を見たときに、ギリシアに行つてみたいといふ念願をいだいたが、いまそれがかなへられたのである。パトライの町には森のある山がうしろにひかへ、そのむかうに大きな山がそびえてゐるが、そこには木がはえてゐない。港に税關があり、船客は列をつくつて取調べの番を待つた。ギリシア人の旅客は先頭のはうにならんでゐても、あとにのこされてトランクのなかを一々しらべられてゐたが、外國人のわたしはなかを見せることもなく、すぐすんで、まちうけてゐたバスに乘つた。

バスは六時三十五分にでた。町なかをとほつてゐると、らつぱをふきならし、太鼓をたたきながら行進してゐる行列にであつた。復活祭の行列であつた。フイレンツエの宿で知合になつたエフチミオプロス氏は今月十一日が復活祭前の大金曜日だから、十日までにギリシアにくるやうにといつてくれてゐたが、アグリヂエントでガリオ氏に聞くと復活祭はどこでもおなじで四月の六日だといつたので、あるいはわたしの聞きちがひかと疑念をいだいてきたのであるが、この行列を見て、ギリシアではやはり一週間おくれておこなはれることがたしかになり、あとでこれはそれぞれのつかふ暦がちがふせいだといふことを知つた。

バスはすぐ郊外にでた。オリイヴが道の兩がはにしげり、絲杉もたつてゐた。バスはパトライ灣ついでコリントス灣にそつて走り、そのコリントス灣がほそい水道となつて、そのむかうに山がそびえ、そのさらにむかうには雪のふりつんだ白い山があらはれてきた。沿道には蘇芳が花さき、藤や梨やアカシアの花もさいてゐる。いちじゆくや枇杷の木も見える。かういつた平地の植物はイタリアと大差

はないが、奥の高山は木がなく、草がすがりついてゐるだけで、岩はだをあらはして荒涼としてゐる點がちがふ。川が見えてきたが、鋪裝路のところで川床が中斷され、川水だけが鋪裝路のうへを走りながれてゐる。それでバスはそこをとほるとき速度をゆるめるが、それでもかなりの水しぶきをあげながらとほつてゆく。ひくい山には木がはえ、その低山と海とのあひだにやや平地があり、そこにオリイヴその他の樹木が生えてゐるが、家はまばらにたつてゐるのみで、そこをバスがとほつてゆく。バスがすすむとやがて山が海岸にせまつて、このわづかの平地もたえ、バスは崖をきりひらいた道にさしかかる。そんなところに藁屋根を幾段にもかさねた藁塚のやうな家がある。蘇芳はイタリアでは滿開だつたのに、このあたりではもうかなり葉がでて、そらまめもかなりのびてゐる。コリントス灣がすこしひらけてきて、對岸が遠ざかり、此岸も平地がひろくなつてきた。對岸に雪山が一つそびえ、かくれたかとおもふとすぐまたあらはれてきた。時刻は七時十五分になつてゐるが、まだ日がてつてゐてあかるい。蘇芳の花をなににするのか、とつてゐる人がゐる。

小さな町をとほつてバスは山のはうにむきをかへて行つた。ユウカリ樹が見えた。家々の瓦はイタリアとおなじ赤瓦だが、ただあたらしい家は四角のものがかなりあり、粗末なものである。オレンジはイタリアほどないが、實があかくなつてゐる。コリントス灣もだいぶんいりこんだところにきてゐるのであらう。川があるが、今度は橋がかかつてゐる。ギリシアの川も川水がかならずしも道をよぎるといふわけではない。七時二十五分といふのに依然としてあかるく日がてつてゐる。川にそつてしばらく走り、川原は石ばかりで、水はわづかしかない。しかし水はきよい。七時半に日がかくれ、ま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com